

# その他

## 東奔西走

—野砲と共に—

山形県 青木長吉

—初めに軍歴をどうぞ。

私は大正六年八月二日、八人兄妹の一人として生まれました。

昭和十四年八月第一補充兵として弘前師団に入隊し、野砲第八連隊に所屬しました。三か月間の初年兵教育はそれは厳しいものです。何しろ砲の訓練と馬の調教の二本建ですので歩兵の二倍の苦勞はしました。唯一の救いは郷土部隊なので訓練後の休憩時や、内務班の

生活は苦しい中にもゆとりがありました。

まだ支那事変が始まってから二年ほどでしたので日曜外出もあり食事もまあまあでした。

一個分隊は野砲一門で、砲に兵三名と馬六頭がつき、彈藥車に兵三名と馬六頭という編成です。

それに分隊長一名、彈藥車長一名、砲手が六名ないし十名で一分隊、十七、八名でした。

一個小隊は二個分隊、一個中隊は二個小隊、一個大隊は三個中隊からなっていました。

馬の手入れには本当に泣かされました。私達は一銭五厘、馬は何百円です。何といっても馬がいないことには訓練も移動もできません。その当時、機械化ということは夢のまた夢だったのでしょう。

—一期の検閲が終わってからどちらにいかれまし

たか。

初年兵教育が終了すると中国派遣です。歓呼の声に送られて、弘前―釜山―山海関―石家荘と馬と一緒の長い旅でした。

十一月に石家荘につくと北支派遣水原部隊、小林部隊の田中隊に配属になり、昭和十六年五月まで警備と討伐の明け暮れでした。石家荘は当時中国では珍しく城壁のない街でした。討伐といっても歩兵部隊が主体で歩砲連合の討伐は全期間を通じて数回ほどでした。

歩兵と連合の討伐で割を食うのは砲兵です。部落にいた時は食糧もなく、それにわれわれは自分のことより先ず馬の手入れです。

しかし歩兵と離れると砲兵隊は惨めです。離れたため全滅した中隊もあります。

馬が斃ればトラック輸送か人力搬送です。大隊砲や速射砲と違い分解搬送が出来ず十数名で野砲をひっぱるので、それは大変なものでしたよ。馬が斃れるとその都度、田中本隊から補充をうけました。

一時、私の小隊が近くの新島の部隊に派遣になりま

した。その頃は勝ちいくさでもあり軍紀は厳しいものでした。

昭和十六年五月帰国し、東部第六十二部隊で召集解除になりました。階級は上等兵です。

―復員され、どうお暮らしますか。

二年ほど家で国鉄に復帰しつつ食料確保のため野良仕事をやっておりました。その間に大東亜戦争が勃発したのでいつ召集がくるかと心待ちしていたところ、昭和十九年二月に召集令状がきて、弘前の北部第十八部隊に入隊しました。勿論野砲です。

再訓練の閑もなく北方轟第一二六三部隊に配属になり千島列島の最北端占守島に派遣になりました。船舶工兵、歩兵、大隊砲、山砲、通信兵と一通り揃っていました。

轟部隊は海上機動部隊で上陸専門部隊です。占守島に無事上陸したのはよいのですが、その後の輸送船はアメリカの潜水艦に撃沈されジリ貧の状態でした。訓練というより毎日掩体壕や蛸壺掘りでした。食糧もひどいもので粟専門でした。カムチャッカ半島やパラム

シル島は晴れた日には指呼の間に見えました。

たまに沖合に味方の輸送船が見えたかと思うといつか姿が見えなくなっているのです。また敵潜水艦に沈められたと話し合っていたものです。

空爆も艦砲射撃もなく置き去られたような感じでした。

二十年四月に沖繩救援の命令で船団を編成小樽に向かいました。三隻の中、二隻が轟沈、辛うじて一隻がその日の中に小樽に上陸しました。

我々、兵隊も薄々制空権も制海権も米軍にとられたことを聞いていましたが、こんなにひどいとは思いませんでした。今考えてみるとよく青森まで輸送船が無事に着港したものだと思います。

青森から鹿児島まで国鉄で行き、六日に鹿児島に着きました。着いた時は沖繩に行く輸送船はなく、沖繩は陥落したとか玉砕したとかで鹿児島で足ぶみです。止むを得ず喜入の第四三〇部隊に編入され、毎日防空壕での生活です。

食糧も、粟、稗で本当に四六時中空腹でした。住民

の好意と協力でたまにさつまいもの差入れがあった時  
本当に涙がこぼれました。

八月十五日遂に無条件降伏。

虚脱した日々が続きました。

召集前国鉄に勤務していたので、国鉄復興の名目で  
比較的早い九月三十日に復員することができました。

その時の階級は兵長です。思い出してみると、弘前—  
石家荘—占守島—鹿児島と文字通り東奔西走です。

今、考えると石家荘にあのままいたら、ビルマか  
フィリピンへの転戦は必至だったでしょう。

また占守島に居残ったら終戦後進攻してきたソ連軍  
と激突し戦死するか、シベリア送りになっていたで  
しょう。

人の運命はわからないものです。軍隊を運隊とはよ  
く言ったものです。

平和裡に農業に従事しながら戦傷死した戦友の冥福  
を祈る今日この頃です。